

[001] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10287>

出版情報：語文研究. 1, 1951-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



る。弓に漆を塗つたり、或いは藤を重く巻くことは弓を強靱にするために丸木弓にも用いられたであろうが、合成弓では、離れを防ぐために、特にその必要があつたのであろう。塗弓や重藤はかくして生れたのであろう。伏竹弓はその後、木の両面に竹を貼つた三枚打の弓となり、更に中央に弓胎を持つ形式に發展して、構造としては一まらず完成せられて、今日へと伝つているのである。この完成期は大體、室町後期から近世初期と推定せられてゐる。(斎藤直芳氏「日本弓道史」)

以上、弓の構造の歴史について述べたが、要するに、合成弓は木と竹との貼り合せのところが離れ易いものである。そして、同じ合成弓のうちでも、塗弓や重藤の弓より白木の方がその可能性が大である。

扱て、去來の句の中の「白木の弓」はかゝる構造を持つた白木の弓なのである。では、このように破損し易い白木の弓が、何故好まれたかという、的弓では、軍射とちがつて、単に射当てるということよりも、射の気分とか風格とかを味うものである。こゝに多分に芸道としての性格が生じて來てゐる。尤も、この気分とか風格とかは、多く射術の巧拙から生ずるもので、単に弓具の如何ばかりによるものではないが、塗弓は白木の弓に比べると鈍重の感がするものである。弓の扱えとか弦音を味うには白木の方に限るのである。露伴が「弓の扱きは白木のかた勝れり」といふのは、このことであらう。しかるに、白木は前にも述べたように、雨露に弱く、殊に暑氣に破損し易いものであるから、心ある射手は夏期には弓を張らないのである。子規が「弦を張れば膠が剥げるとして秋冷の候を待ちてするなり」といふのは右の理由によるのである。かく見ると、「弦張らん」は、やはり子規の説

くように、文字通りに解しなくてはならぬ。

右のような解釈のもとに、この句の創作意図をうかがつて見るに、夏期長らく弦を休めていた白木の弓に、秋風が立ち初めると共に、最初の弦をかけて、その張り顔や調子を、あたかも長らく別れていた人に会つたようななつかしきをもつて、と見こむ見する、という瞬時の情感を形象化したのではなからうか。この句が、とくに「初秋」の部に入れられてゐる意義も了解せられるのではないかと思う。

執筆者紹介

笹淵 友一	東京女子大学教授
平井 秀文	福岡学芸大学教授
永井 寛	福岡県立八女高等学校教諭
目加田 さくを	福岡女子大学助教
横山 正	大阪学芸大学助教
秋山 正次	熊本師範学校教授
橋本元二郎	大阪市立大学講師
石井 利男	九州大学文学部研究生
重松 泰雄	九州大学大学院特別研究生
立川昭二郎	九州大学大学院特別研究生